

〈特集〉「女子校の国語、男子校の国語」

少年・少女のための文学

—感性を重んじた国語教室より—

はじめに

共学校の教員を十年、男子校に勤務して十四年目になる。女子の感受性と男子の感受性の間には明らかな差異があることは感じてきた。国語の試験結果は男子よりも女子が上回る。逆に数学や理科など所謂理系は圧倒的に数的にも男子が優位に立つ。自然科学分野で名をあげる女子は「リケジョ」と呼ばれるほど稀少なのである。女子同士で小さな手紙のやり取りをするが男子がすると奇妙になる。そもそも女子の言語感覚が生得的に優れていると言ってしまうまでだが、日本独特な生活背景として、男の子は外で元気に体を動かし、女の子は室内で静かに読書をする、そうでなければ、男の子は元気がない、女の子はお転婆と批判されてきた。そういった社会的な事情も言語感覚の差を生み出している

荒 木 竜 平

のかも知れない。少なくとも女の子は、押し並べて「読む」力を蓄えてきたのであろう。

子どもを産む大仕事を宿命づけられた女性の出産に耐えるように強く生まれついているのに対して、子どもを産まない男性は強くある必要がなかった。だからこそ女の子はおしとやかに優しく育てられて、男の子はたくましく育てられる。シモース・ド・ボーヴォワールは「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」と女性らしさというものは社会的に後天的に作られるものだと言書『第二の性』の中で述べている。たしかに、『赤毛のアン』や『ハイジ』、『長くつ下のピッピ』などは、今も女の子の心をつかんで放さない。女の子は主人公の運命に自らを置き換えて、女性としての美しい生き方を学んでいく。一方、男の子たちの読み物と言えば、『トム・ソーヤーの冒険』や『十五少年漂流記』といった

所謂冒険物が定番である。男の子は、未知の世界に憧れ、胸を躍らせながら勇氣や正義について学んでいくのである。

このように、幼少時に与えられる本から「男の子向き」と「女の子向き」は識別されている。確かに、その例は外国の児童文学においては枚挙にいとまがない。女の子向きの文学が先述の作品に並んで、『小公女』や『若草物語』であれば、『宝島』や『三銃士』は男の子向きといえるだろう。しかし、日本の児童文学には性別は意識されない。日本の児童文学には「女の子向き」と「男の子向き」の作品が曖昧であることは明確である。『怪人二十面相』などの推理物となると、今も昔も小学生の男の子たちが好んで読む定番であるが、『おしいれのぼうけん』、『いやいやえん』、『ガラスのうさぎ』などベストセラーの日本の児童文学は子どもの世界に普遍的である。それは中等教育における教科書教材にも意識化されていない。ジェンダーを意識しつつ現実と向き合い、生き方を考えさせる仕組みが国語教室に構築されていないだけでも知れない。ここでは日本の文学教材に対する感受性に男女差はあるのかという課題的観点から、かつての授業実践記録を基に、男子ならではと思われる読みの立ち上げと、女子特有と思われる読み方を振り返り、その表象を探る。

第一章 女子向けの文学と共学校における授業実践より

学習者と教材

一九九六年、一学年七十名の約七割が理系学部に進学を希望している共学校で次のような実践を記録している。問題文との相性

で国語の成績が決まると信じている高校二年生に「論理性を解く」を長期ビジョンとして掲げて、国語教室の運営にあたっていた頃である。これは、たった一つの正解を導く受験国語と、読みの多様性を求め深めていく文学教育の折衷案でもある。文学作品との劇的な出会いや読み深めの成功も、最終的に定期考査での点数化で評価するという、指導者にとっても生徒にとっても無味乾燥なこの営みに常に葛藤を抱いていた。その解決法として落ち着いたのが「論理性」というキーワードである。論理性があるからこそ問いが成立し、倫理性があるからこそ読みに変化が与えられる。その後、私の国語教室における根幹になる立ち位置である。

ここで、長野まゆみ『八月六日上々天気』を取り上げる。高校一年生までの文学作品との出会いの中で生徒たちは、根拠に基づいた自分なりの読み深めができるようになっていく。この教材を通じて、いかに根拠（あるいは物的証拠）に基づいたイメージに頼った浅い作品理解ではない——読み深めができるか、また他者と関わることを通して、自らの読みを修正していく能動的な読みの意識を喚起させることを目的としている。

長野まゆみは、高校生の文学少女たちに支持される女性作家である。『八月六日上々天気』は『文藝』一九九五年春季号に発表され、後に河出書房新社により発行された。

長野まゆみ（ながのまゆみ）

一九五九年、東京に生まれる。女子美術大学卒業。一九八八年、『少年アリス』で第二十五回文藝賞を受賞しベストセラーに。十代の少女たちを中心に熱狂的支持がある。代表作

に『天体議會』『テレヴィジョン・シテイ』『銀河電灯譚』等がある。

次に、荒川洋治氏の書評（『産経新聞』文芸時評）を挙げておく。終戦前後の若い女性と少年の交流を綴る、長野まゆみの長編『八月六日上々天気』に注目した。三十代半ばの作者が自分の記憶にない歴史的空間を再生することは容易ではないが、食べ物をはじめとする生活の手触りを生かしながら、時間と人間のドラマを描き出している。

「八月六日上々天気」の時代背景は、戦時中の日本である題名からも窺い知ることができるように、広島への原爆投下当日でこの小説は締め括られている。ただ、そこには教科書にも収載されている井伏鱒二の『黒い雨』に見られるような悲惨さや、原民喜『夏の花』に描写される惨劇はない。物語は指を折るように着実に八月六日へと進んでいく。戦争の余波を受けながらも、日常に住む従姉弟の運命に読者の関心は否応なく引きつけられる。しかし、物語の終末は存外美しい。

「蟬がしきりに啼きたてるほか、何の音もせず、瞭らかな碧天が光った。」

そもそも、長野まゆみは美術を専攻しているとあって、手に取る作品はどれも色彩鮮やかな絵画ばかりで言語教育には適さないと感じた時、不意に出会ったのがこの小説である。異色である。教科書にはほとんど見られない女性作家の女性主人公の作品であること、にもかかわらず大学入学試験の小説問題ではこういういた

作品が採択されるようになってきたことも当作品を教材化した理由であるが、当時の私の一番の関心は、生徒たちがこの語られない作品とどう向き合い、どんな物語と判断するかであった。

第二節 授業形態と展開

外的環境―つまり他者との関わりの中から、個々の学習者の読みを確立していくことを狙いとした。当然のことながら、指導者から主題の押しつけはせずに、学習者間の能動的な意見交換を触発する。多くの意見を発露したい私は、班活動を取り込んでいたのだが、四・五名の人数においても消極的、内気な生徒は、この場においても発言の機会無く、折角の鋭い読みが埋没されてしまう。そこで、より情意的な読み手を育てるため、パネルディスカッションを採用した。パネラーは自らの読みを論理的に立証しつつ、他者の読みに読みの視点を変え、時に修正する。フロアはパネラー同士の意見交換に耳を傾けつつ、最終的に根拠づけられる読みをワークシートにまとめる。他者との関わりによってテクスト論を突き詰めていく作業に徹したい。

単行本の内容を十分割、B4用紙を毎時一枚ずつ配布する。プリントは計十枚あり、一時間につき一枚のペースで配布される。国語の時間が来る度に生徒たちは、新たなストーリーに向き合う。初めは否応なしに「読書」していた生徒も、だんだん続きを知りたくなる（あるいは続きを無意識のうちに想像する）。このように、次の時間までのお楽しみとして、彼らの興味・関心を持続させることを目的とする。そして、生徒たちの日常（休み時間や下校時

や家庭生活など」の中に、登場人物たちがたち現れるようになる
と、一段階は成功といえよう。

第三節 読みの立ち上げ

パネルディスカッションの司会是指導者が行った。「指導者の読
みを提示しないこと」「論拠を明確にさせること」は鉄則である。
ある程度の根回しをしたものの、昨年度のパネルディスカッショ
ンの経験により積極的な意見交換が行われた。当時、「プリント3
の二十三行目の表現にあるように……」といった話し方で議論す
るよう指導していることを記録している。このためか彼らの意識
の中に「論拠を挙げることで論破できる」と学んだようである。

個人的な質問、問題点の提示、賛同の見解から、この作品は「原
爆小説」か「恋愛小説」かで、意見が二分されて論点はそこに絞
られた。「珠紀と史郎のささやかな日常が原爆によって無情に奪わ
れる物語」なのか「珠紀と史郎が恋愛を育む物語」なのかの結論
は出なかったが、休み時間においてもこの討論は果断無く続けら
れた。明らかに彼らは、他者との関わりの中から、自己を客観視し、
能動的な読み手として、内部から湧き上がってくるものに基づく
学習活動を具現化していた。ただ、そのほとんどが女子である。
放課後も議論を続ける男子をたまに見かけても、それは女子に巻
き込まれているのである。以下、パネラーの意見趣旨である。なお、
論拠となる箇所の指摘は割愛している。

〈女子①〉 この作品のイメージは、最後に舞台となる市岡家の庭

です。つまり、珠紀が史郎の姿をさがす場所です。太陽光線がと
てもまぶしくて、明るすぎて何も見えない、見たい物が見えない
世界がここにありますが、もし、この作品の中に空襲で町が焼け野
原になる描写があつたなら、それがこの作品のイメージになった
かも知れない。描かれていることは、原爆が落ちるまでの幸福だつ
た時間だけ。原爆によってはっきりと切り取られた幸福な時間だ
けを描いていますが、それだけにこの後が不気味で怖い。読者の
想像を上手くかき立てる手法を使っている。原爆の悲惨さをまぶ
しすぎる太陽光線で示唆していると思います。

〈女子②〉 私も同感です。描かないことで、そのものを強調的に
描く手法がここにあります。淡々と女子学生とその従弟の日常を描
いているだけのように表面的には見て取れるが、その一つ一つが
すべて八月六日の「その瞬間」に結びついていく。たとえば、ラ
ストの「瞭らかな碧天が光った」は原爆投下のまさに「その瞬間」
であることを暗示しているし、史郎の幻が現れたことは史郎の身
の上に何かが起こったことを示している。伯父のあつけない死は
戦争の虚しさを感じさせるし、史郎の帰りを待って捨てた白玉の
泡蒸しは、帰らぬ人を持つ悲しみの象徴です。文章全般に描写さ
れた珠紀と史郎の結びつきは、原爆による史郎の死をもつて一層
深い悲しみにしてしまふのです。だから、これは戦争がいかに悲
しいものであるかを主張している小説です。

〈女子③〉 たしかに、文中に描かれていることは、平成の世を生
きる私にもよくわかる日常生活の様々なことで、それがどこまで
もどこまでも続き、出来事らしい出来事というものが見当たらず

せん。そうしてついに最後まで読み終わり、史郎が原爆の被害者になったんだということを悟った時、これまでの平和な日常が違う色をもって見えてきました。珠紀と史郎の仲睦まじい場面や感情のやり取り、成長の過程を一瞬にして滅茶苦茶にしてみました。原爆に私は個人的に憎しみを覚えました。でも、それは私にヒロシマの予備知識があつたからそう感じただけで、テキストとして読んだ時にそう言えるのかしら。

《男子①》 僕も率直に悲しい時代を生きなければなかつた人たちの尊敬と慈愛の念がわき上がりました。でも、それはやっぱりヒロシマを知っているからそうなってしまうだけで、この十枚のプリントに描かれていることは、美しい情景描写と愛しい人との別れだけなんです。別れ方は何でもいい、ファンタジックな別れ方に原爆めいたものを用いたということでしょうか。

《男子②》 珠紀と史郎というふたりの主人公の関係性をいかに切なく優しく描ききるかにこの作品の値打ちはあるんじゃないでしょうか。このふたり以外の登場人物を最小限にとどめ、ふたりの間の距離を浮かび上がらせています。そして不安定だったふたりの精神的な距離や、東京と広島といった物理的な距離、この二つの距離感がこの物語の終焉において絶対的になったということを示して描ききったといったところです。内容から戦時中ということとは明確ですが、戦争批判には至っていません。だから原爆をこの話の中心に持つてくるのは間違っていると思います。

《女子①》 たしかに、原爆を描いたなら原爆に対する考え方や位置づけが示されてもいいのに、単に生活のリセットボタンのよう

な働きしかしていない。そう考えると、たまたま舞台が広島で、たまたま時代が戦時中だったと考えるのが妥当ですね。

《女子②》 では、従姉弟の思慕が成就しなかつた物語と捉えていいのかな。戦時中の衣服や食生活が事細かに描かれている部分などなんらかのメッセージ性があるとは思えません。

《男子①》 東京駅での別れの場面で、市岡が史郎に進路に関して、「君たちはもう少しましに生きなければならぬ」などと諭す発言は時代の重厚性が感じられる。戦争小説仕立ての恋愛小説というところかな。

《男子③》 原爆の悲惨さを描いていないから恋愛小説です。最後まで読み通した時、こんな原爆の描き方もあるんだなと思つてしまったけど、これでは原爆を語っていることにならない。もつとも従姉弟同士の愛なんて異常だと思うけど、それしか書かれていないので恋愛物語だと思っています。

《男子②》 タイトルの「上々天気」から「その瞬間」の悲惨さとは感じ取れない。日常をぶつた切る原爆であればその見るも無惨な状況を作品の中に投影すべきです。いかにも脳天気なタイトルから、日本の悲惨な歴史を敢えて避けたために、これは珠紀と史郎との恋愛小説になってしまっていると思います。

《男子③》 これで原爆がモチーフだなんて言うとは史実に対して不誠実だと思います。

期せずして、女子と男子で二分された。説得力を持つ見解はフロアからも提示されずに終わったのだが、女子は恋愛に傾かず、

むしろ恋愛に傾きがちなのは男子であった。もともと私には「描かないことで、そのものをより強調的に描く」〈女子②〉小説をどう理解するかという期待があった。つまり、私は、長野まゆみなりの戦争批判が示されていると、すでに主題を用意していたのである。ところが、「描かれていることは、美しい情景描写と愛しい人との別れだけ」〈男子①〉、「原爆めいたものを用いた」〈男子①〉、「史実に対して不誠実」〈男子③〉という発言に、私の準備していた読みは揺さぶられた。ただ、「原爆によつてはつきりと切り取られた幸福な時間だけを描いて」〈女子①〉いることも事実である。

女子の指摘で特徴的なことは生活の描写への着眼である。食べ物や衣服や風習から「なんらかのメッセージ性がある」〈女子②〉という指摘は象徴的である。授業後も食べ物に関心を示して、白玉の泡蒸し作りに挑戦してみる現象も男子には見られない。長野まゆみは、あと書きとして次のように述懐している。

「筆者あと書き」

昭和二十年、当時十四才だった私の父は、広島で被爆した。爆心地から直線でわずか一・二キロの地点である。ところがささいな軽傷で助かったのである。私は、父が被爆者であることを最近まで知らなかった。父は軽傷で済んだため、「広島を語る資格はない」と言う。しつこく聞き出す私に重い口を開いてくれた。そんな父の姿勢に共鳴した私はどうしても遺しておきたいと思った。遺さなければならぬと、宿命感を抱いて描いた作品である。

この単元終了後、迷った挙げ句にこの文章をプリント化して配布した。恋愛物語と読んだ男子は勝負に負けた悔しさでいっぱいである。一方、女子の中には父に寄り添い、父の姿勢を貫いた結果生まれた、「父と共に成長した物語」だという読みが新たに立ち上がった。

第二章 男子向けの文学と男子校における授業実践より

第一節 学習者と教材

私が山田詠美氏の『風葬の教室』に関心を持ったのは、田中実氏の次の一文である。

「天皇が死んだ前年1988年は、吉本ばななの『キッチン』が刊行され、ばななブームが起こった年だった。カツ丼を運ぶ女の子の話はそれなりに楽しめた。ブームはその前年の『サラダ記念日』、『ノルウェイの森』に続くものだった。だが、私はその年の三月に刊行された山田詠美の『風葬の教室』の方をばななや俵万智の作品と比較して、はるかに熱心に行っている。」

私がちょうど宮沢賢治の『よだかの星』との連結教材を探しあぐねていた頃のことである。当時は男女共学校の中学一年生担当ということもあり、後に教科書編集過程で議論の対象にもなった所謂「性的描写」について躊躇してしまい、この小説の力を使わずにやり過ごしてしまった。田中実氏はこの作品について次のように述べている。

「この小説の主人公杏は小学五年生、彼女はクラスのみんなから

（いじめ）に合う。クラスの「空氣」は「草や木」とも通底し、杏を殺しにかかっていた。杏の闘いはこれに向き合うことだった。彼女は心の中でクラスの仲間を一人ひとり殺し、「風葬」していった。だがこれだけではない。他にも誰も模倣することの出来ないフェティシズム——アッコの汚れた上履きへの欲望——に固執した。五年三組には杏のような変態は他に誰もいなかった。これをクラスに突き付け、クラス全体の「空氣」、「霧閉氣」を一変させたのであり、「草や木」にまで無限拡大する（天皇制）の「空氣」に「抜け道」を造り出したのである。山田詠美が『風葬の教室』で試みたことは、〈出口ナシ〉の「教室」で〈出口〉を造ることだった。彼女はそこで現状に対する激しい違和を突き付け、図らずも無意識で小規模ながら一種の「天皇制殺し」を試みていたのである。」

やや拡大解釈とも思えるような「天皇制」との絡みは確かに作品世界に通底するものであり、響き合うような我々の心的回路の存在を鋭く突いてくるとでも言うべき内容を、この作品自体が孕んでいることもまた確かだと思われる。そこで、小学生、中学生という共同体の中に生まれがちな軋轢をくぐり抜けた上、また新たな共同体に取り込まれた高校一年生（男子のみ）であるがゆえ、この教材を国語教室に持ち込むことによって、多様な読みの世界が立ち上がることが予測される。他、教材採択の理由は下記の通りである。

女主人公を中心とする教科書教材が小・中・高を通して数少ないことを考えると、「本宮杏」という小学五年生の女主人公の視座

が男主人公のそれを通じて描かれるものとは異質な感触を与えるため。

人々の共有する場の「空氣」、「霧閉氣」が、時に人を傷つけ、あるいは人を生かしも殺しもするということ、と同時に「個」をしつかりと持つということ——それを徳育的な形で解説によるのではなく、あくまでも作品世界を足がかりとして見据えたい。

この作品には、危機を一挙に解決してくれるヒーローは登場しない。この作品の主人公「本宮杏」は具体的な現実と苦悩を自ら生き、潜り抜けていくような、生徒たちにとっては等身大（あるいはむしろ弱い立場）の者として立ち現れてくる。この主人公の、安易な解決の許されぬ深刻な現実への対峙の姿を通して、彼女にとつての深刻な現実を生み出すものが、「個」を消失した場所に醸し出される「空氣」、「霧閉氣」といったものであることを確認させたい。

第二節 授業形態と展開

成績、進路に関わりなく高校生の興味、関心の方向性は出会いの瞬間まで方向性を特定することは出来ない。よって、教科書で関心を惹く作品（教材）に出会った場合、知的好奇心の強い彼らが結末まで読み通してしまうというのはよくあることだ。そしておそらく、彼らの多くは結末を知った時点で作品（あるいは授業）に対する関心を多少なりとも減少させていくのであろうし、彼らの関心を持続させること自体なかなか難しい。

しかしながら、そんな生徒たちも決まった曜日には必ず某漫画週刊誌を手にし、ある曜日の決まった時間にはしっかりとテレビの前に座を占める。すなわち、彼らは所謂「続き物」形式でその関心を次回（次週）へ持ち越すことには慣れていると言えるのではないか。このことは、学習活動の能動性といった地平の遥かさをさし示しているようである。そこで授業は一時限に付き、プリント化した本文一枚を配布し、その読解に取り組むという形態をとる。

私は国語教室において文学作品（教材）を読み進めていく作業が、生徒たちにとって、例えば《芝居》を見るときのような心的作業を喚起するものであってもよいのではないかと考えている。ここで、《芝居》を引き合いに出すのは、授業における読みの作業——国語教室という場における作品の共有作業といつてもよい——が、どこまでもマイペースに徹することの可能な個人の読書とは異なり、芝居小屋や劇場における作品の共有作業のごとく、読者である個々の生徒にとって、否応なく一定の外在的ペースによりざるを得ない部分を持っていると思うからだ。

飽くまでもその結果について未知な《芝居》について言うならば、私たち観客は、これからのような事件が待っているかわからない未来の不確かな世界へと登場人物と共に分け入っていくのであり、その過程において印象的な場面や台詞、あるいは登場人物の人間像が浮かび上がってくるのを目の当たりにするのである。そして、作品としての《芝居》の全貌を統合的に把握することは、それを見終わった時、初めて可能となる。

毎時間、プリントが一枚一枚配られる度、生徒は主人公と共に彼女をめぐる次なる現実に立ち会っていく。そして、十二部のプリントが彼らの手元に揃ったとき、『風葬の教室』の全貌は見えてくる。その過程、すなわちストーリー展開を楽しむという作業に取り組むことと自体が、国語教室における文学作品（教材）の授業のひとつの目標であつてもいいはずである。

今回の授業形態について言うと、例えば、田島伸夫氏が次のように述べた中に一定の示唆を求めることは可能であらう。

「作品の世界は、文章を順次性に即して読むことによつて明らかになつていきます。順次性を大切にするとするのは、単に、文章が時間的・線条的なものだという常識になつていただけではありません。まず通読して終わりまでいつてから初めて考え出す場合と、中途で考えながら読みすすめていく場合とでは、作品理解に重大な相違を生じることがあるからです。（中略）文学作品から文学の世界を作っていく上で重要なのは、部分をしっかりとつかみ、その積み重ねによつて作品の全体像をつくっていく過程です。」

第三節 読みの立ち上げ

主張の強い女の子がいて、それを取り巻く女の子たちがいて、男の子は目に映る物にしか反応しない……小学生特有のコミュニティの本質に誰もが共感する。日常の小さな事が契機となつていじめが助長していく。そこには宗教になぞらえられた空気、雰囲気蔓延している。そんな中で本性を包み隠すことなく、生きていこうとする主人公の本宮杏の人物像を、ワークシート

を作成することによって立ち上がらせてみた。

〈男子①〉本宮杏は何を考えているかわからない恐ろしい子。自らを客観視できるほど成長している。同級生にいたら生意気な奴、高校一年の私から見ると末恐ろしい小学生となる。でも、小学生の世界において本当に怖いのは恵美子なのだろう。高校一年生になった今となっては、いじめる側の精神性の未熟さも、いじめられる側の精神性も脆弱さもよくわかる。ただ一点、「あんころもち」はシュークリームが好き」という姉の言葉が不可解であった。最近になって「あんころもち」とは杏のニックネームであることがわかったのだが、お菓子の話のくだりで突然こんな名称を出されても混乱する。

〈男子②〉現実に向き合って生きている人間の営みが切ないまでに感じ取られた。私自身が小学生の時にいじめられた体験があるため、杏の一つ一つの心境が心に響いた。皆が意図的に二人一組を作る場面、「目の前の事にしか反応できない」小学生たちの持つ空気感は今もなお肌に張り付いている。そして好かれもせず嫌われもしない平凡な生活が最も幸せであることを知ったが、この小説の主人公も同じように考えていたことが小さな幸せである。

〈男子③〉単純にいじめの怖さを感じました。正確に言えば、いじめのメカニズムに人間の恐ろしさが現れていると学びました。孤独を忌み嫌う一人の人間が連帯感を感じたいがために、一人の人間を切り離す。切り離すために周囲の人間を巻き込むことによって、ただただ一人を攻撃する。確固たる意志のなく闇雲に「引ッ

搔く」ようすは、確かに「ある種の宗教」と言えます。杏の冷静さをもつてしても感情は乱される。理屈抜きに人間はエゴイズムに徹する動物だということを知りました。

〈男子④〉最も大人であるのは主人公本宮杏に他ならない。その大人が絶望的に子どもである小学生に負けてしまうのが、私は悔しくてならない。子どもたちを正しい道に導くはずの先生でさえ子どもである。これが市井の常態であるとするならば、私は生きることに絶望する。家族を軸とした心の形成、家族を拠り所に生きていく姿は、明治以降の日本の家族の在り方を象徴しているように思えた。

〈男子⑤〉小学生の女の子が一人ひとりを軽蔑することで平和な生活を取り戻す成長の物語と捉えることができるであろう。確かに杏は、見方を変化させるという手段で、打破できなかった苦境を緩和することに成功した。しかしクラス全員との対立構図が消滅したわけではない。小学生の世界に絶対的価値が存在しないと決めつけてしまうものかどうか。私は姉の価値論に賛同する。

共有されている小学生の教室という場とくぐり抜けてきた小学生の世界観を通じて、かつての現実を対象化し、現在という時間を認識しようとする姿勢が窺われる。そこには、視点人物本宮杏を取り巻く世界を共有し、主人公本宮杏と共に現実世界を類型化し、共に闘おうとする男子高校生が見える。本宮杏の言動に対する批判や嫌悪はほとんど見られない。異性としての杏、小学生としての杏、そして主人公としての杏を静かに支援

したいというさやかな欲求が授業の中で感じ取られた。

第三章 結びにかえて

近隣の女子校の先生に依頼してアンケートを行ってもらった。印象に残っている、あるいは好きな教材を挙げてもらったところ、ある程度予想された結果が得られた。筆者の勤務する男子校も含めて、「羅生門」、「山月記」、「ころ」、「夢十夜」などの定番教材は根強い。これは女子、男子の違いはさほど見られない。指導者も指導のパターンを持ち、無意識に力を込めている要因もあるのだろう。中に、「先生の熱の入りが『羅生門』だけ違ったから」や「『オッペルと象』の最後の一文は誰が言ったのか、っていう課題を授業で取り組んだのが印象的だから」といったような、印象深い授業を理由にしている回答もあった。定番といえば「水の東西」や「ことばの力」といった評論も男女ともに人気がある。しかし、環境問題や経済などを扱った内容、または理系の知識が必要とされるテキストは、女子校においては反応が良くない。一方で、エッセー的な評論、比較文化論などは比較的好まれている。女子のみならず男子においても一般的に恋愛を扱う教材の肌合いが良さそうである。ただ、好きな教材の理由として女子に特徴的なことは、ひとつの言葉やフレーズを取り上げることである。男子にはほとんどと言っていいほど見られない。男子はわくわくさせるプロットであることに作品としての価値を置くことが多い。歌を聴く時も男子はメロディやリズムといったノリで音楽の良さを感じるが、女子は歌詞を重んじる。学園祭

などの学校行事においても、男子は浮き浮きした感情のまま動くが、女子はだれに見られても恥ずかしくないものを完成させようとする。

このように感受性の差異を踏まえてみると教科指導にはもっと深みが増す。生活指導の方法では、男子には直線的で済むことがあるが、女子にはじっくり時間を掛けて論ずることを心掛けなければならない。生徒と向き合う姿勢は、教科指導の場であってもそれぞれの留意すべき点は意識されるべきだが、教材についてはさまざまな試行があってもいい。ジェンダーを意識した授業実践から思わぬ効果が発揮されるかも知れない。二十年以上前に発刊された『女子高生のための文章図鑑』（筑摩書房、金井景子・川口晴美・紅野謙介・朴裕河編、一九九二年六月初版）の序文にはこう書かれている。

たくさんの女主人公（ヒロイン）に出会い、女の人たちの発するさまざまな表現を受けとめるための場所である。（中略）その上でこれからの長い人生を、周りのそしてまだ見ぬ多くの女たちや男たちとのびのび共生していく、知恵と勇氣と自分の言葉を養ってもらえたらなと欲深いことをもくろんでいる。

先述の通り、教科書教材に女性主人公の文学教材はきわめて少ない背景もあるが、多様化する女性の生き方を示唆する作品集としては今も貴重である。

その一年後、『男子高生のための文章図鑑』（筑摩書房、金井景子・川口晴美・紅野謙介・材木谷敦編、一九九三年十二月十

五日初版）が発刊されている。思春期にある男子高生が現実と向き合う際に、等身大の自分を認識して、ビジョンを持ち、生きるための判断力を身につけるヒントとしての言葉の世界が、この書物のコンセプトである。女として強く生きる、男として強く生きる、そのためのヒントとしての文学教材が選ばれてもいい時代かも知れない。

（函館ラ・サール高等学校）